

肝細胞癌の1治験例

(谷津保健病院消化器内科, *外科)

三橋 容子・藤野 信之・清水 京子・
新井 信・藤田 徹*・平山 芳文*・
糟谷 忍*・御子柴幸男*

マイクロ波組織凝固装置(以下MTC)は、生体組織内にてマイクロ波を発振し、組織で吸収され発生する誘電加熱を利用して組織を凝固させる。このため止血が確実で、様々な手術に応用されている。当院では、MTCを腹腔鏡下肝生検の止血時に使用し、現在までに237症例の肝生検を施行しているが、再出血例は認めていない。このような利点を生かして、我々は62歳の肝細胞癌の症例に対して腹腔鏡下にMTCによる治療を試みた。癌細胞は、明らかに変性壊死に陥っており、MTCは腹腔鏡下肝生検の止血時以外に、肝表面に突出した肝癌の治療にも有効な方法であると考えられた。

44. 当院における食道静脈瘤硬化療法施行例の検討 (至誠会第二病院消化器内科)

関谷 仁美・村尾 奈美・石黒 久貴・
足立ヒトミ・野村 淑子

1988年8月から1991年1月までに経験した食道静脈瘤硬化療法(以下EIS)施行例23例(緊急例6例, 待期例4例, 予防例13例)につき検討した。

その結果, ①出血例では全例に止血効果を認めた。②治療効果はF因子・F₂まで改善1例, F₁ 5例, F₀ 13例, RC消失率94.7%であった。③再発率: 平均再発期間は治療後F₁例で各々60%, 9.3カ月, F₀例で46%, 11.2カ月でありF₀の方が良好な成績であった。④再硬化療法施行例では数回でいずれもF₀まで改善した。⑤合併症は重篤なものはなく, また経過中の死亡例で静脈瘤破裂によるものはなかった。

以上より食道静脈瘤硬化療法は破裂例のみでなく予防的にも有用であり静脈瘤消失を目標として施行した上で再発を起こした例については早期に再治療することが望ましいと考えられた。

45. アルコール性肝硬変に合併した spur cell anemia の1例

(至誠会第二病院消化器内科,
東京女子医大生化学*)

村尾 奈美・関谷 仁美・石黒 久貴・
足立ヒトミ・野村 淑子・伊藤 栄子*

症例は51歳の男性, 大酒家, 1982年より肝障害を指摘された。1990年11月, 全身倦怠感, 浮腫の増強, お

よび黄疸が出現し当科入院。入院時生化学検査, 肝炎ウイルス検査, 画像診断よりアルコール性肝硬変と診断, また間接型優位の高ビリルビン血症, LDHの上昇, 貧血があり, 溶血性貧血の合併が見られた。末梢血に spur cell が出現し, 血清LCAT活性の低下, 胆汁酸の上昇, ケノデオキシコール酸分画の増加, 赤血球膜分析で, 遊離コレステロール/リン脂質の上昇があり, spur cell anemia と診断した。経過中, 肺水腫, 食道静脈瘤破裂を合併し, 一時改善するも, 貧血, 黄疸の改善なく肺炎で死亡した。Spur cell anemia の報告例は少ないが末期アルコール性肝硬変には, 比較的良く見られる病態と思われる。

46. 脂肪肝の発生機序に関する実験的検討

(東京女子医大成人医学センター)

栗原 毅・渡辺 麗・秋本真寿美・
新見 晶子・石川 雅枝・高田茂登子・
三輪 洋子・赤上 晃・勝 健一・
山内 大三・前田 淳・重本 六男・
山下 克子・横山 泉

SD系雄性ラットに高コレステロール食, コリン欠乏食, 高炭水化物食として高デンプン食, 高蔗糖食, 高果糖食を4週間与え脂肪肝を作製した。まず改良を加えたレーザー血流計ALF2100を使用して肝表面の微小循環血流測定したところ, 全群で有意に低下していたが, 特にコリン欠乏食, 高コレステロール食で著明であり, これは脂肪肝の程度と相関した。また, 脂肪変性の程度と肝組織中性脂肪は相関するものの, 血清中性脂肪との関連性は認めなかった。炭水化物食のうち, 高果糖食は脂肪肝を起こしやすい傾向にあった。さらにLPL活性の低下が脂肪肝成立に関与していることが示唆された。

47. 自己免疫性肝炎の病型についての検討

(国立横浜病院消化器科)

大守 智子・林 直諒・進藤 仁・
小松 達司・近藤 由美・池田 郁夫・
米満 春美

当院における自己免疫性肝炎26例を臨床経過から5型に分類し, その代表例の経過および頻度を呈示した。

第1型は, 黄疸, 腹水, トランスアミナーゼ高値をもって発症した急性発症の典型型で, 症例数は3例であった。第2型は, 発症時肝不全を伴わない急性肝炎様発症型で, 症例数は7例であった。第3型は劇症肝炎型で, 症例数は1例であった。第4型は, 慢性肝炎様の経過をとる潜行型定型型で, 症例数は11例であっ